

ゆらぎの概念分析

—がんサバイバーへの適用にむけて—

島田 美鈴¹

(2009年9月28日受付, 2009年12月14日受理)

Yuragi : A Concept Analysis — An Application to a Cancer Survivor —

Misuzu SHIMADA¹

(Received: September 28, 2009, Accepted: December 14, 2009)

要 旨

心理社会的側面に関する研究において、ゆらぎの概念が用いられているにもかかわらず、概念を明確にしている研究は少ない。そこで本研究は、ゆらぎという概念がもつ特徴を明らかにし、看護実践や研究における概念の有用性とがんサバイバーへの適用を検討することを目的とした。Walker & Avant の手法に準拠して分析した結果、6属性、3先行要件、3帰結が抽出できた。6つの属性からゆらぎを「自己の内面世界が不安定な力動的変化の過程で、ゆらぐことのできる能力であり、環境と相互作用する個々特有の体験である」と定義された。属性と帰結の分析結果からゆらぎの概念を考察した結果、ゆらぎは、自己の内面世界に対して能動的な機能を持つ日本特有な概念であると考えられた。以上のことから、看護実践や研究にとって有用な概念であり、さらにはがんサバイバーへの適用においても有用であることが示唆された。

キーワード：ゆらぎ (*yuragi*)、がんサバイバー、概念分析

Abstract

In psychosocial study, *yuragi* is used. But, in fact, the concept is not yet fully understood. The purpose is to clarify characteristics of *yuragi* and to consider the usefulness on nursing intervention and nursing research. Furthermore, a concept of *yuragi* is to consider an application for cancer survivor. I developed a concept analysis followed the technique of Walker and Avant. I found that *yuragi* has six attributes, three antecedents, three consequences were able to extract it. From the results, *yuragi* can be defined as “*yuragi* is a process of a psychodynamic change that the self-inner world is insecurity, is the ability that can waver, is interaction with environment, is an individual experience.” *Yuragi* is a concept to have an active function for the self-inner world. Therefore, Japanese cancer survivors could draw on the ability of *yuragi*. Furthermore, it is a Japanese characteristic concept. Therefore, *yuragi* is a concept that was useful in nursing intervention and research. The usefulness of this concept in Japanese cancer nursing and research is suggested.

Key words: *yuragi*, cancer survivor, concept analysis

1 高知女子大学大学院健康生活科学研究科 Kochi Women's University Graduate School of Health Science

I. はじめに

ゆらぎとは、①ゆらぐこと、動揺することを意味する場合と、②物理的・数学的な平均値からのズレを意味する場合がある(日本語大辞典, 1989; 大辞泉, 1995; 科学大辞典, 1985)。また、語源大辞典(1988)では、揺らめくは、ゆらゆらと動くとなっている。一般的に、ゆらぎは、木々がゆらぐ、ゆらぐ社会など、自然現象や社会現象が変動・変化しているさまを表現する時に用いられる。一方、自信がゆらぐ、ゆれる思い等のように心理的側面に対して用いられる場合も多くある。心理的側面を表現するにもかかわらず、心理学事典や社会学辞典、医学辞典、看護学事典には、ゆらぎが記載されていない。

医療や看護においても、ゆらぎに関する研究がなされている。研究テーマにゆらぎが用いられ、目的において、ゆらぎ自体や、その有効性を明らかにする等、ゆらぎの体験を明らかにしようとしている研究(谷口ら, 2003; 廣川ら, 2004; 野村ら, 2004; 小山ら, 2008)。また、研究結果として、導き出されたカテゴリーにゆらぎが用いられている研究(旗持, 2003; 赤石ら, 2005; 林田ら, 2005)。ゆらぎを用いた医学的研究の多くは、生理学や治療、臨床検査など、細胞レベルに関するものがほとんどで、ゆらぎの物理的側面を人体という生体システムに適用させ、ゆらぎとして焦点をあてたものである。また看護領域における物理的側面やシステムに関する研究では、音のゆらぎを取り入れた介入研究や、脳波のゆらぎ等がある。つまりこれらの医学や看護領域における研究の多くは、ゆらぎの物理学的意味を基礎とした研究である。

一方、ゆらぎを使って、心理的側面に焦点を当てた研究がある。これらの研究では、ゆらぎを苦悩や不安、葛藤、精神的動揺としてとらえ、自己概念や自己価値、認識の変容に関するもの、また、ゆらぎの体験や病いの体験など体験に関するもの、意思決定、適応・対処行動などに関するものなどがある。がん看護領域においても、がん罹患後のサバイバーの心理的側面である懸念や苦悩に

関する研究やサバイバーとして生きて行くための対処や適応に関する研究において、結果として抽出されたカテゴリーに“自分らしく生きることのゆらぎ”(林田ら, 2005)、“こころの揺らぎ”(片山ら, 2008)など、ゆらぎが用いられている研究(尾沼ら, 1999; 赤石ら, 2005; 戈木ら, 2004)は少なくない。これらの心理社会的側面に焦点を当てた研究で、ゆらぎが多く用いられているにもかかわらず、概念として洗練されておらず、曖昧であると言わざるを得ない。社会福祉分野では、尾崎(2000)が、ゆらぎを以下のように定義している。

①「ゆらぎ」はシステムや判断、感情が動揺し、葛藤する状態。②「ゆらぎ」は、混乱、危機状態を意味する側面をもつ。③「ゆらぎ」は多面的な見方、複層的な視野、新たな発見、システムや人の変化・成長を導く契機でもある。しかし、看護分野では、ゆらぎに概念的な検討を行い、定義を明確にしたうえで用いている研究は、ほとんど見当たらないのが現状である。本研究では、ゆらぎの概念を明確にし、看護実践や研究において有用性のある概念に発展させ、がんサバイバーへの適用を検討することを目的に概念分析を行う。

II. 概念分析の方法

概念の特性と属性を明確化するために Walker & Avant の分析手法に準拠した。Walker & Avant の概念分析は、Wilson に由来する概念分析の手法で、概念・陳述・理論という理論の要素と、分析・統合・派生というアプローチの組み合わせから9つの理論構築の方策を示した。この方法は、概念のあらゆる使い方についての明確化、定義的属性・先行要件・帰結の特定、経験的指標を決定することを含んでいる。そのため、依然あいまいで、看護領域において明確にされていないゆらぎの概念を洗練し、看護領域におけるゆらぎの現象をより明確にするためには、Walker & Avant の概念分析のアプローチ法が適していると考えた。ただし、本研究では、概念を明確にし、がんサバイバーへの適用への検討が目的である。そのため、

概念の範囲や境界を明らかにしようとする典型例は設定しなかった。

データ収集は、文献データベースソフトであるCINAHL (1982~2008年)と医学中央雑誌(1983~2008年)を用いて検索を行った。キーワードは、医学中央雑誌では「ゆらぎ」、CINAHLでは「sway、fluctuation、waver」と「psychological」で検索を行った。CINAHLでは、出版物タイプをJournal Articleに制限したが、医学中央雑誌では制限しなかった。CINAHLでの検索結果は、「sway」では64件、「fluctuation」では165件、「waver」では55件が抽出されたが、physical therapyに関するもので、研究の焦点は病態生理学に関するものであった。日本語の心理的側面に焦点があてられたゆらぎの意味で取り扱われている論文は、日本人研究者による日本語論文2件のみであった。医学中央雑誌での検索結果では972件が抽出されたが、その中から心理社会的側面を扱った論文は60件であった。それら抽出された62件の文献が頻繁に引用している書籍1冊、および二次文献を追加し、最終的に67文献と書籍2冊を分析対象とした。

分析は、分析対象の各文献について、取り扱っているテーマ、研究対象、場(setting)、その文献の中心的内容を表現する単語、ゆらぎの使い方、定義の有無、属性、先行要件、帰結に関連する情報を整理するフォーマットを作成した。属性、先行要件、帰結に関しては、それぞれに該当する箇所を抽出し、フォーマットに入力した。それらのデータごとにラベルをつけ、コード化し、類似性と相違性に基づきカテゴリー化を行った。

Ⅲ. 結果

1. ゆらぎ概念の用法

辞書、文献、新聞等を参考にゆらぎの概念の用いられ方を検討すると、主に以下の5つの用法が認められた。

- ① 「自信がゆらぐ」「自己のゆらぎ」「こころのゆらぎ」「価値観のゆらぎ」等、心理的側面がゆらぐことを表現する用法。

- ② 「枝が風にゆらぐ」「身体がゆらぐ」等、自然現象や物体としての身体がゆらぐことを表現する用法。

- ③ 「〇〇政党(勢力)のゆらぎ」「〇〇企業のゆらぎ」「金融のゆらぎ」等、社会情勢の変化を表現する用法。

- ④ 物理学・化学における平均値からのズレを意味する「熱運動や確率現象におけるゆらぎ」や、また物理学の定義の代表的な「1/fゆらぎ」(小川のせせらぎや波の打ち寄せる音など人間が心地よく感じる自然界のリズム)を意味する「1/fゆらぎの音楽」等、物理学・化学の平均値を中心として変動する現象を表現する用法。

- ⑤ 「心拍・血圧・脈波・脳波のゆらぎ」「歩行・姿勢のゆらぎ」等、細胞の変動や姿勢などが安定していない様を表現する医学的な用法。これは前述の平均値や基準値のズレという観点がベースとなった用法である。

本研究では、心理社会的側面のゆらぎの概念を明確にすることが目的であるため、①の用法に焦点を絞り分析を行った。

対象文献とそれらの文献が取り扱っているテーマ、およびゆらぎの用法は資料1に示した。67文献の論文タイプは、調査報告44、事例報告6、特集/解説17であった。タイトル・サブタイトルにゆらぎを使用している文献は35件であった。調査報告では、ゆらぎ体験やゆらぎ体験への影響因子を明らかにするなど、研究目的としてゆらぎが用いられている文献が12件、また研究結果の抽出カテゴリー名や因子名にゆらぎが用いられている文献が23件であった。ゆらぎを定義しているものは15件(表1)であった。

2. 属性

6つの属性が抽出された。カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉にて示す。

1) 【自己の内面世界】

【自己の内面世界】は、〈こころのゆらぎ〉〈認

識のゆらぎ)〈自己概念のゆらぎ)の3つのサブカテゴリーから構成された。〈こころのゆらぎ)は、34文献でみられ、戸惑いや不安などの感情・気持ちや情緒など、ゆらぎをこころであるとしてとらえていた。〈認識のゆらぎ)は、9文献でみられ、認知・行動反応や判断、意思決定など、ゆらぎを認識であるとしてとらえていた。〈自己概念のゆらぎ)は、19文献でみられ、存在価値やアイデンティティ、自己のありようなど、ゆらぎを自己概念であるとしてとらえていた。〈こころのゆらぎ)〈認識のゆらぎ)〈自己概念のゆらぎ)のこころ・認識・自己概念は、人間の精神、つまり内面世界を構成するものである。この内面世界は、心理社会的側面を表すゆらぎの根底にあり、ゆらぎの中心的役割を担う本質である。

2)【不安定】

【不安定】は、〈安定せずゆれ動く様)〈2極性・相剋性)の2つのサブカテゴリーから構成された。〈安定せずゆれ動く様)は、26文献でみられ、①葛藤・動揺・混乱など心理的に安定していない状態や、②幅があり動的・流動的・変動するもの、幅や隙間がある、エネルギーや物質の流入・流出などゆれ動いている状態としてとらえていた。また、③行動原理やシステムの秩序・構造の解体など恒常性や安定性を保てなくなった非平衡状態として捉えていた。〈2極性・相剋性)は、7文献でみられ、理想と現実のギャップや乖離、アンビバレントな気持ち、2面性の相克があるなど2極性・相剋性があるととらえていた。つまり、不安定は、揺らぐこと、動揺することなど、ゆらぎの

表1 ゆらぎを定義している文献

No	定義
1	エネルギーや物質の流入・流出があり、安定していないシステムの状態、すなわち「非平衡状態」においてみられるシステムの秩序・構造の動揺のこと。物理学では沸騰において突発的に生じる気泡や、生物学では突然変異によって生じる生物種などが典型。ゆらぎは偶然によって生じる現象であるため、その発生、変化を予測することは難しい。既存のシステムがゆらぎの増大によって恒常性・安定性を保てなくなった状態を「混沌」と呼び、また混沌状態から新たな次元の秩序・構造を作り上げ、再びシステムの安定を取り戻すことを「進化」と呼ぶ。このように、ゆらぎを通じてシステムは進化する
2	①「ゆらぎ」はシステムや判断、感情が動揺し、葛藤する状態。②「ゆらぎ」は、混乱、危機状態を意味する側面をもつ。③「ゆらぎ」は多面的な見方、複層的な視野、新たな発見、システムや人の変化・成長を導く契機でもある
5	秩序と構造を組織化してきた行動原理に不都合が生じる。ゆらぎは、このような不安定な過渡を生きなければならない事態
8	感情がしなる状態、つまり柔軟にゆれ動く状態であり、一定の方向だけに偏ってしまうことはない流動的な状態
12	ジレンマなどの感情であるが、単に動揺ではなく、根本には真摯な自己知覚がある
27	援助を行った時、これでいいのかと悩み自問自答すること
28	自己価値のゆらぎ：助産師としての能力、考え、行動様式、姿勢がゆらぎ、保てなくなった結果、迷い、悩み、葛藤、悔やみが生じた状態。その状態における感じ、考え、思い
29	精神科看護実習で動揺したこと様々な感情を抱いたと自覚したこと。「精神的動揺」
34	離職を意識するほど看護師としての自分の存在について迷い悩んだ経験
35	がんの診断・治療過程において生じた予測不能な出来事に対し、家族としての安定を維持するための力動的変化の過程
40	学生が体験する、自身のゆれ、感情的動揺、葛藤する状態での不安・迷い・わからなさ・不安全感・挫折感を含む危機と成長の契機を含んだ心がゆれている状態
45	仮説：こどもの気まぐれ行動は、中断・後戻り・移行・前進しながらゆらぎつつ発達する。定義：内的・外的作用で不規則な動きをし、フィードバックしながらシステムを変え、発達を促す
49	戸惑い、葛藤し、不安や焦りを感じている様子
62	混乱、危機状態を意味する側面を持ち、成長を導く契機であり、判断基準や判断、感情がゆれ動く状態
69	指導者がターミナル期のがん患者を受け持つ学生を指導する上で、動揺・葛藤・迷い・不安・不安全感などを感じている状態

ありさまやようすである。そして、ゆらぎを定義している15文献の全てにおいて、ゆらぎのありさまやようすが定義として記載されていた。

3) 【力動的变化の過程】

【力動的变化の過程】は、19文献でみられ、連続的過程やサイクルや時間的変化があるなど変化することや移りゆく道筋、またフィードバックするなど、ゆらぎには、均衡を保とうとする働きがあり、安定を維持するための力動的变化の過程であるととらえていた。つまり、力動的变化の過程は、安定を維持するために均衡を保とうとする変化の過程である。

4) 【能力】

【能力】は、6文献でみられ、葛藤を感じる力、共感できる力、自己の資質を資源と理解できる力、環境との協力関係を築く力、極端にゆらぎすぎたり極端に揺らがな過ぎても力にならない等、ゆらぎを力としてとらえていた。また、自分自身への働きかけや、ゆらぎは本質を見極める動機となるものと、ゆらぎを能力としてとらえていた。さらに尾崎(2000)は、“「ゆらぐ」ことのできる力”としている。したがって、ゆらぎは能力であるとしてとらえている。つまり、能力は、自分自身に働きかけ、自己理解できる能力であり、環境との協力関係を築くことのできる能力である。

5) 【環境との相互作用】

【環境との相互作用】は、10文献でみられ、他者との関係性や周囲の人々や環境との関係と関連するものであると、ゆらぎと環境との相互関係があるととらえていた。つまり、環境との相互作用は、自己を取り巻く環境と相互作用するものである。

6) 【個々特有の体験】

【個々特有の体験】は、〈ゆらぎは体験するもの〉〈ゆらぎは個別的〉の2つのサブカテゴリーから構成された。〈ゆらぎは体験するもの〉は、8文献でみられ、ゆらぎは体験や経験するものであるととらえていた。〈ゆらぎは個別的〉は、3文献でみられ、人それぞれに違うものであるという

個々特有のものであるととらえていた。つまり、個々特有な体験は、人それぞれに違う特有の体験である。

上述の6つの属性は、それぞれの文献で重複していた。

以上の属性から、ゆらぎは自己の内面世界が不安定な力動的变化の過程であることが明らかになった。そして、ゆらぎはゆらぐことのできる能力であること、さらに環境と相互作用する個々特有の体験であることが明らかになった。よって、ゆらぎの概念を「自己の内面世界が不安定な力動的变化の過程で、ゆらぐことのできる能力であり、環境と相互作用する個々特有の体験である」と定義した。

3. 先行要件

3つの先行要件が抽出された。

【衝撃的な出来事】は、〈予期せぬ・未知なる出来事〉〈非日常的出来事〉〈自己および家族の罹患〉の3つのサブカテゴリーで構成された。〈予期せぬ・未知なる出来事〉は、看護基礎教育における実習は、看護学生にとって未知なる出来事であるとして、ゆらぎの先行要件の要素となっていた。また、突発的に予期していない出来事の発生も先行要件の要素となっていた。〈非日常的出来事〉では、環境の変化や、特定の life event など、突然日常性が非日常へ変化することが、ゆらぎの先行要件の要素となっていた。〈自己および家族の罹患〉では、自身や家族のがん罹患や治療過程での予測不可能な出来事、また家族の生命の危機によりゆらぎが生じていた。

【意思決定すべき事柄】は、疾患を持ちながら出産するか否かなど、意思決定を迫られる事柄や、看護学生が精神科看護実習において妄想や幻聴など患者の症状から起こる言動に対してどのように行動すればいいのかわからない状況に遭遇した時にゆらぎが生じていた。

【周囲との不均衡な関係】では、他者からの非難、自分の意見を提示できない、また、他者に阻

まれていると感じる等、自己を取り巻く周囲の人々との関係性においてアンバランスを感じた時にゆらぎが生じていた。

以上のことから、ゆらぎの先行要件は、【衝撃的な出来事】【意思決定すべき事柄】【周囲との不均衡な関係】であることが明らかになった。

4. 帰結

3つの帰結が抽出された。

【新たな自己の生成へ向かう成長】は、〈成長〉〈新たな自己の生成〉の2つのサブカテゴリーで構成された。〈成長〉では、積極性の強化、自分への自信や周囲への思いやり、大切なものがわかるなど、適応にとどまらない変化が生じる。また、ゆらぎの体験から、自分に働きかけ、振り返り、学び、そして次へ発展する力となる。つまり、ゆらぎは新たな発見や成長を導く可能性があるとしていた。〈新たな自己の生成〉では、ゆらぎの中で自己理解を深める、自己のゆらぎは自己の立て直しの作業であり自己意識を組み替えることである、また、アイデンティティを変化させ新たな自我を獲得する過程である等、新たな自己の生成がゆらぎの帰結となっていた。この帰結は、ゆらぎのポジティブな側面を表していた。

【より高い秩序への移行】は、〈新たな生き方への移行〉〈適応〉〈安定維持〉〈新たな発見〉の4つのサブカテゴリーで構成された。〈新たな生き方への移行〉では、ゆらぎが生じることによって、自己同一性を保持しようとして、新たな構造を求め、新たな価値観を作り上げたり、新たな生き方を獲得すると結論づけていた。〈適応〉では、ゆらぎへの対処は見通しを意味する。また、ゆらぎと向き合うことで、問題を明確化でき、問題解決となったなど、ゆらぎは、適応に向かう対処行動へと発展していた。〈安定維持〉では、家族のありようをゆらぎながら維持することや、ゆらぎながら総体としての1つのまとまりをつくるなど、ゆらぎは、安定維持へと発展していた。〈新たな発見〉では、ゆらぎの中で経験したことの意

味を探求し、新たな発見・感動を得るなど、ゆらぎによって、新たな発見があるとしていた。この帰結も、前述の帰結と同様に、ゆらぎのポジティブな側面を表していた。

【危機】は、大きなゆらぎや明らかなゆらぎは、不安を大きくし失望感をもたらす混乱や危機に陥る。また、自尊感情の低下・アイデンティティの混乱や喪失というように自己概念へも影響を及ぼす帰結となっていた。この帰結は、ゆらぎのネガティブな側面を表している。

以上、ゆらぎは、ポジティブな側面やネガティブな側面の一側面のみでの帰結ではなく、成長と危機を導く契機となる等、ポジティブ・ネガティブの両側面の帰結があると結論づけている文献が9文献あった。よって、ゆらぎの帰結は、【新たな自己の生成へ向かう成長】【より高い秩序への移行】を導く側面と、【危機】を招く側面の両側面をもつことが明らかになった。

5. 関連概念

辞書によると「ゆらぎ」は「動揺」と同義語であると示されていた。属性として抽出された【不安定】は、揺らぐこと、動揺することなど、ゆらぎのありさまやようすである。よって、「不安定」や「動揺」は、ゆらぎの関連概念であると考えられる。加えて、「葛藤」「混乱」「不確実性」はデータとして抽出された概念である。これらの概念もゆらぎのありさまやようすを示すものであり、関連概念として考えることができる。また、帰結では「危機」「成長」「移行」「適応」を含むカテゴリーおよびサブカテゴリーが抽出された。これらはゆらぎの成りゆきを表す概念であると考えられる。そのため、これらも関連概念であると考えられる。属性や帰結の分析によって抽出された上述の概念は、ゆらぎのありさまやようす、成りゆきを表現する概念ではあるが、ゆらぎの根底にあり、ゆらぎの中心的役割を担う本質まで包含された概念ではないと考える。そのため、ゆらぎの代替となる概念とは言えず、関連概念として位置づ

けた。対象文献によるゆらぎの定義においても、ゆらぎのありさまやようすは強調されているが、ゆらぎの根底にあり、ゆらぎの中心的役割を担う本質については、感情、不安、迷い、不安全感、考え、思い、心、システムなど不明瞭である。そして、フィードバックなど、ゆらぎが力動的変化の過程であることを定義しているのは2文献のみである。以上のことから、ゆらぎは、ゆらぎの中心的役割を担う本質である【自己の内面世界】とそのありさまやようすである【不安定】、さらに【力動的変化の過程】【能力】【環境との相互作用】【個々特有の体験】まで包括している概念であると考えられる。

6. ゆらぎの先行要件・属性・帰結の関連図

6属性、3先行要件、3帰結から、ゆらぎ概念の先行要件・属性・帰結の関連図を作成した(図1)。ゆらぎは【衝撃的な出来事】【意思決定すべき事柄】【周囲との不均衡な関係】が先行要件となって生じるものである。それは【自己の内面世界】が【不安定】な【力動的変化の過程】で、ゆらぐことのできる【能力】であり、【環境との相互作用】をする【個々特有の体験】である。そして、ゆらぎの帰結として【新たなる自己へ向かう成長】【より高い秩序への移行】【危機】をもたらすものである。

IV. 考 察

1. ゆらぎの概念の特徴

ゆらぎの概念分析のために文献レビューを行っ

た結果、CINHALでの検索結果において、本研究で抽出された属性を表すゆらぎの意味で取り扱われている論文は、日本人研究者による日本語論文2件のみで、英語圏における該当論文は見当たらなかった。また、医学中央雑誌での検索結果でも、心理的側面に焦点を当てている文献は、62件と全抽出件数から考えると少なかった。対象文献で、key wordやabstractにゆらぎに対応する英語表記されているものは21文献あった。それらの文献におけるゆらぎの表示は、YURAGIとローマ字表記しているもの、wavering、fluctuation、unsure、instability、uncertainty、anxiety、nervous、ambiguity、inequality、conflict、turbulenceと様々な英語表記がなされていた。さらに、日本語要旨にはゆらぎの記載があるものの、英語abstractでは省略されている文献もあった。英語での該当文献がないこと理由の1つとして、用語の語源に端を発していることが考えられる。そもそもゆらぎは、イリヤ・ブリゴジン博士のカオス理論において1つのキーワードとして用いられ、生命論パラダイムへと発展してきた概念である(小澤, 1997; 田坂, 1998)。そして、そのカオス理論の考え方を導入したのが、Mishelの“病気における不確実性”である(Bailey et al., 2005)。すなわち、ゆらぎは、物質の構造や性質や物質間の反応を研究する化学から発展した概念である。自然科学の概念が心理学に応用できる概念まで発展していないため、心理的側面がゆれ動く様をゆらぎとしてとらえていないと考える。さらに、日本的な文化がこころのゆれ動く様をゆらぎと表現してきたと

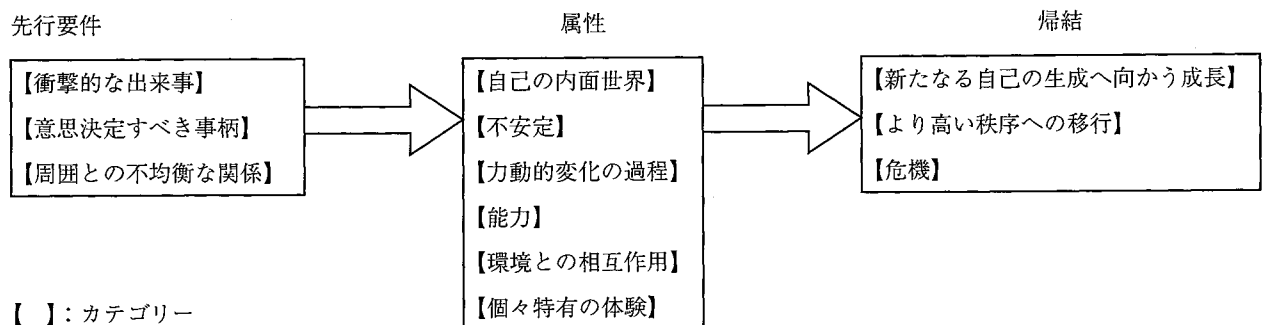


図1 ゆらぎ概念の先行要件・属性・帰結の関連図

考えられる。自分と他人との関係を曖昧にしようとする甘えの構造（土居，1989）は日本の社会構造の特徴である。また、決めつけないで曖昧にする日本人の認識の特性（岡本，2004）など、日本には曖昧さの文化が根ざしていると言える。ところがゆれ動く様をゆらぎと表現するのは、日本の曖昧さの文化を反映し、日本人の心理・心情をとらえることのできる概念であろうと考えられる。以上のことから、心理的側面に対して、ゆらぎの概念を用いるのは日本特有であると考えられる。したがって、本研究では、ゆらぎをローマ字表記の *yuragi* とする。

次にゆらぎを関連概念である適応と比較しながら、ゆらぎの特徴を考察したい。適応は、Roy の「適応モデル」や、Lazarus と Folkman の「ストレス／評価／対処／適応」理論、さらに、Lazarus と Folkman の理論を基に「病気における不確実性」へと発展させた Michel の理論が代表的である。それぞれにおける適応の考え方は、Roy においては、ヘルソン理論から構想されており、ヘルソン理論は、適応は環境の変化に肯定的に反応する過程であると論じている (Kenneth. D, 2005)。Michel においては、不確実性を最終的にどのように受入れるかと論じている (Bailey et al., 2005)。そして、Michel の不確実性の概念分析を行った鈴木 (1998) は、不確実性の帰結は適応に向かおうとしていると論じている。さらに Lazarus と Folkman においては、対処の結果として適応があり、対処は処理しようとしてなされる努力であるとしている。いずれも環境への変化や現在の状況をいかに受入れるか、また、自分を外界に適応させようとして対処するものである。つまり、自己を取り巻く環境の変化に自己を適応させようとするもので、主体である自己が環境の変化に合わせるという受動的側面があると考えられることもできる。しかし、本研究においては、ゆらぎを【能力】であることと見え、その帰結は、【新たなる自己の生成へ向かう成長】【より高い秩序への移行】であることが明らかになった。このことは、ゆら

ぎが、適応にとどまらない変化であること、自分自身に働きかけ発展することのできる能力であること、さらに、自己理解を深め自己意識を組み替えることであり、新たな構造を求め作り上げていくことであり、意味を探求し新たな発見を導くものである。すなわち、ゆらぎは、外界に対して自分を適応させていくものではなく、自分自身に対して自ら働きかかるという自己に対して能動的な側面を持つ概念であろうと考える。換言すれば、ゆれ動きながらも自己の中に潜む力や能力を呼び起こし、新たなる自己やより高い秩序への移行へ向かおうとする自己の内面世界に対して能動的な側面をもつものである。つまり、自分自身の持てる力に、自分自身が働きかけ、自分自身の持てる力を最大限に発揮できる可能性を持つ概念であると考えられる。

以上のことから、ゆらぎの概念の特徴は、ゆらぎの中心的役割である本質とそのありさまやようす、さらに【力動的変化の過程】【能力】【環境との相互作用】【個々特有の体験】などを含み、自己の内面世界に対して能動的な機能を持つ日本特有な概念であると考えた。

分析結果からゆらぎの概念の特徴を考察した結果、ゆらぎは、自己のもてる力を発揮できる可能性をもつポジティブな性質を含む概念であると考えられた。そして、【新たなる自己の生成へ向かう成長】【より高い秩序への移行】という好ましい帰結をもたらすものである。ゆらぎの概念を看護実践や研究に適用することは、以下のような利点があると考えられる。看護師にとっては、ゆらぎを体験している対象者の理解と対象の持てる力を引き出すための援助の示唆を得る一助となるであろう。また対象者にとっては、自己の中に潜む力や能力を呼び起こすことによって、新しい自己として生きる道を開く活路となるであろう。すなわち、ゆらぎを看護実践や研究に適用させることは、看護師や対象者の利益につながるものであると考えられることができ、看護にとって有用な概念であると考えられる。

2. がんサバイバーへの適用

がんサバイバーは、がん罹患によって、苦悩・不安・懸念などの複雑でネガティブな心理状態を体験している (Fannine et al., 1999; Marlene et al., 2000; Karen et al., 2000; 千崎ら, 2001; 岩瀬ら, 2001; 神崎ら, 2002; 近藤ら, 2002; Doris et al., 2003; Doris et al., 2003; 岩倉ら, 2004; 長沼ら, 2004; 赤石ら, 2004; 荻, 2004; 赤石ら, 2005; 小貫ら, 2006; 小野ら, 2006; Monica et al., 2006 片山ら, 2008; 近藤ら, 2008; Donna et al., 2008; Jennifer et al., 2008; Angela et al., 2008; Victoria et al., 2008)。そして、そのネガティブな心理状態は、他者との関係 (尾沼ら, 1999) や自己概念に影響 (西村, 2005) を及ぼし、そのことがサバイバーとして、よりよく生きて行くことを阻む要因となっている。つまり、がん罹患によって、サバイバーの内面世界であるところ・認識・自己概念が不安定であると言える。つまり、がんサバイバーは、ゆらぎを体験していると言える。

しかし、がんサバイバーは、自己の内面世界が不安定のまま生活しているわけではなく、ゆらぎに立ち向かう、回避、対処など様々は取組みによって、サバイバーとして生きていこうとしている (水野, 1998; 今泉ら, 1999; 奥坂ら, 2000; 大野, 2000; 永井, 2001; 蛭子, 2001; 千崎ら, 2001; 飯野ら, 2002; 大池, 2003; 赤石ら, 2005; 林田ら, 2005; 藤田, 2006; 山脇ら, 2006; Ercole et al., 2006; 恩地ら, 2007; 渡邊ら, 2007; 岩黒, 2005; 荒井 a, 2006; 荒井 b, 2006; Fannie et al., 1999; Jennifer et al., 2008; Helene et al., 2009)。すなわち、がんサバイバーは、ゆらぎを体験しながらも、自分らしさを取り戻そうと、適応を目指して生きる意味を見出そうとしている (川村, 2005)。

以上のように、がんサバイバーは、がん告知のその時からずっと継続的にゆらぎを体験し、がんサバイバーとしてよりよく生きていこうとしている。すなわち、本研究結果で得られたゆらぎその

ものを体験していると言える。「死」「苦痛」などのネガティブなイメージの強いがん罹患による心理的動揺は計り知れず、がんサバイバーが危機的な状況を経験しているであろうことは容易に想像できる。前述のゆらぎの看護実践への適用と同様に、がんサバイバーの危機的状況をゆらぎの観点から適用させることで、自己の内面世界が不安定な状態にありながらも、その状況は、がんサバイバーの持てる力を引き出すことができる状況であると看護者がとらえることができれば、がんサバイバーがゆらぎの状況にあっても、サバイバー自身の持つ潜在能力を発見し、その能力に働きかけようとする看護援助の示唆を得ることができるのではないかと考える。つまり、がんサバイバーへの理解を深め、看護援助の示唆を得ることができるかと考える。また、がんサバイバーにとっても、がん罹患という苦悩の体験からの脱却、すなわち、新しい自己として生きる道を開く活路につながる看護援助を受けることができるのではないかと考え、ゆらぎは、がん看護にとっても有用な概念であると考えられる。

V. 結論

ゆらぎという概念を明確にし、看護実践や研究において有用性のある概念に発展させ、がんサバイバーへの適用を検討することを目的に、Walker & Avant の分析手法に準拠し、概念分析を行った。結果、6つの属性、3つの先行要件、3つの帰結が抽出された。そして、6つの属性からゆらぎを「自己の内面世界が不安定な力動的変化の過程で、ゆらぐことのできる能力であり、環境と相互作用する個々特有の体験である」と定義された。さらに、ゆらぎは、ゆらぎの中心的役割を担う本質である【自己の内面世界】とそのありさまやようすである【不安定】、さらに【力動的変化の過程】【能力】【環境との相互作用】【個々特有の体験】を含み、自己の内面世界に対して能動的な機能を持つ日本特有な概念であると考えられた。以上のことから、看護実践や研究にとって有

用な概念であり、さらにはがんサバイバーへの適用においても有用であることが示唆された。

謝 辞

ご指導いただきました藤田佐和教授に感謝申し上げます。

引用文献

- 岩倉文代, 平岡康子(2004):スピリチュアルペインのある患者1事例の看護を振り返って, 日本看護学会論文集:成人看護Ⅱ, 35, 261-262.
- 赤石三佐代, 布施裕子, 神田清子(2004):初めて放射線治療を受けるがん患者の気持ちとストレス対処行動に関する質的研究, 群馬保健学紀要, 25, 77-84.
- 赤石三佐代, 石田順子, 石田和子, 植原早苗, 神田清子(2005):放射線治療経過に伴う乳がん患者の気持ちの変化, *The Kitakanto Medical Journal*, 55(2), 105-113.
- Angela Sammarco, & Lynda M. Konecny, (2008): Quality of life, social support, and uncertainty among Latina breast cancer survivors, *Oncology Nursing Forum*, 35(5), 844-849.
- Ann, M. T., Martha, R. A (2002): "Nursing Theory and Their Work", 都留伸子監訳(2005), 看護理論家とその業績第3版, 医学書院.
- 荒井春生(2006):余命告知を受けたがん患者の適応過程, 日本看護学会論文集:成人看護Ⅱ, 37, 454-456.
- 荒井春生(2006):壮年期にがんの体験を持つ高齢者ががんの体験を受け止めるプロセス, 日本看護学会論文集:老年看護, 37, 242-244.
- 土居健郎(1989):「甘え」の構造, 弘文堂, 東京
- Donna A. Clemmens, Kathleen Knaf, Elise L. Lev, EdD, & Puth McCorkle, (2008): Cervical cancer: patterns of long-term survival, *Oncology Nursing Forum*, 35(6), 897-903
- Howell D; Fitch MI; Deane KA(2003): Impact of ovarian cancer perceived by women, *Cancer Nursing*, 26(1), 1-9.
- 蛭子真澄(2001):胃がん術後患者の治療回復早期の心理状況, 日本がん看護学会誌, 15(2), 41-51.
- Ercole Vellone, MSN Marria Luisa Rega, MSN Caterina Galletti, MSN & Marlene Z. Cohen, FAAN (2006): Hope and related variables in Italian cancer patients, *Cancer Nursing*, 29(5): 356-366
- Gaston-Johansson F; Ohly KV; Fall-Dickson JM; Nanda JP; Kennedy MJ(1999): Pain, psychological distress, health status, and coping in patients with breast cancer scheduled for autotransplantation, *Oncology Nursing Forum*, 26(8), 1337-1345
- 萩あや子(2004):退院後1年6ヶ月を経過した胃がん術後患者の「食べる」ことの体験, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 11(1), 11-20.
- 旗持知恵子(2003):心筋梗塞を発症した成人病者の見通しの語りとその意味, 聖路加看護学会誌, 7(1), 9-16
- 林田裕美, 岡光京子, 三牧好子(2005):外来で化学療法を受けながら生活するがん患者の困難と対処. 広島県立保健福祉大学誌:人間と科学, 5(1), 67-76.
- Helene Svensson, Yvonne Brandberg, Zakaria Einbeigi Thamas Hatschek & Karin Ahlberg (2009): Psychological reactions to progression of metastatic breast cancer--an interview study, *Cancer Nursing*, 32(1), 55-63
- 廣川聖子, 柴田真紀(2004):精神科看護師としての存在価値の揺らぎを体験した場面の分析, 日本看護研究学会雑誌, 27(3), 126.
- 藤田佐和(2006):退院後のがん体験者の適応過程における拡がり, 高知女子大学看護学会誌, 31(1), 5-18.
- 飯野京子, 小松浩子(2002):化学療法を受けるがん患者の効果的なセルフケア行動を促進する要素の分析, 日本がん看護学会誌, 16(2), 68-78.
- 今泉郷子, 遠藤恵美子(1999):入退院を繰り返し

- ながら化学療法を受ける胃癌患者の遭遇する問題を乗り越える体験としてのプロセス, 日本がん看護学会誌, 13(1), 53-64.
- 岩黒真紀(2005): 外来で化学療法を受ける胃癌患者の症状体験とそのマネジメントーIASMを概念枠組としてー, 大阪医科大学附属看護専門学校紀要, 11, 50-61.
- 岩瀬薫, 浅井千佳, 矢萩節子, 浦山礼子(2001): はじめて化学療法を受ける患者の心理とその援助, 日本看護学会論文集: 成人看護Ⅱ, 32, 153-155.
- Jennifer L. Mattioli, MSN, APNP, NP-C, Rhonda Repinski, MSN, ANP-BC, & Sharon L. Chappy, CNOR (2008): The meaning of hope and social support in patients receiving chemotherapy, *Oncology Nursing Forum*, 35(5), 822-829 .
- 神崎初美, 城戸良弘(2002): 胃切除を受ける早期胃癌患者に対する認知行動療法ーセルフエフェカシーと心理的ストレスに対するノート記述と面接による介入効果ー, 日本看護科学学会誌, 22(4), 1-10.
- karen Hassey Dow, Phd, FAAN, & Patricia Lafferty, MSN(200): Quality of life, survivorship, and psychosocial adjustment of young women with breast cancer after breast-conserving surgery and radiation therapy, *Oncology Nursing Forum*, 27 (10), 1555-1564.
- 片山美子, 小笠原昭彦(2008): がん患者の入院治療経験によるこころの苦痛と看護介入に関する仮説, 日本看護科学学会誌, 28(3), 52-58.
- 近藤恵子, 鈴木志津枝(2008): 地域で生活する胃全摘術後がん患者の自己概念, 高知女子大学看護学会誌, 33(1), 28-38.
- 近藤由香, 渋谷優子(2002): 痛みのある外来がん患者のモルヒネ使用に対する懸念と服薬行動に関する研究, 日本がん看護学会誌, 16(1), 5-16.
- 小貫夏子, 坂下智珠子(2006): 混沌の中にある胃癌終末期患者との関わりーマーガレット・ニューマン理論の看護実践への適応ー, 日本看護学会論文集: 成人看護Ⅱ, 37, 24-25.
- 小山裕子, 森本悦子, 福井里美(2008): がん患者と接する看護師の「ゆらぎ」とその対処, 日本がん看護学会誌, 22(suppl), 102.
- Margaret A. Newman (1994) / 手島恵(2005): マーガレット・ニューマン看護論 拡張する意識としての健康, 医学書院, 東京
- Marlene Zichi Cohen & Cathaleen Dawson Ley, MN (2000): Bone marrow transplantation: the battle for hope in the face of fear, *Oncology Nursing Forum*, 27(3), 473-480
- 水野道代(1998): がん体験者の適応を特徴づける認識の構造, 日本がん看護学会誌, 12(1), 28-40.
- Monica Moene ENT Ingegerd Bergbom BSc DHSc RNT & Carola Skott (2006): Patients' existential situation prior to colorectal surgery, *Journal of Advanced Nursing*, 54 (2): 199-207
- 永井智子(2001): 外来通院中の成人造血管腫瘍患者の心理社会的適応に関連する要因の研究, 日本がん看護学会誌, 15(1), 5-15.
- 長沼奈緒美, 鎌倉やよい, 長谷川美鶴, 金田久江(2004): 手術を受ける乳癌患者の治療に関する意思決定の構造, 日本看護研究学会雑誌, 27(2), 45-57.
- 日本総合研究所編(1998) / 田坂広志: 生命論パラダイムの時代(21-79), 第三文明社, 東京
- 西村歌織(2005): 喉頭摘出術を受け退院を控えた患者の自己概念の様相, 日本看護科学学会誌, 25(4), 80-89
- 野村美香, 藤田佳子, 三井成子(2004): がん治療過程における家族集団のゆらぎに関する研究, 死の臨床, 27(1), 69-75.
- 岡本五十雄(2004): ゆらぐこころ 日本人の障害と疾病の受容・克服, 医歯薬出版株式会社, 東京
- 奥坂喜美子, 数間恵子(2000): 胃術後患者の職場復帰に伴う症状の変化と食行動に関する研究, 日本看護科学学会誌, 20(3), 60-68.
- 恩地裕美子, 古瀬みどり(2007): 安定期に移行す

- る胃癌術後患者の積極的対処行動と生活習慣、身体的状況および主観的健康統制感との関連、日本看護研究学会雑誌, 30(5), 71-76.
- 小野宏子, 富永昭子(2006): 病状悪化に伴う精神的苦痛から立ち上がったがん患者の看護を振り返る, *がん看護*, 11(7), 781-783.
- 尾沼奈緒美, 佐藤禮子, 井上智子(1999): 乳がん患者の自己概念の変化に即した看護援助, *日本看護科学会誌*, 19(2), 59-67.
- 大池美也子(2003): 外科的治療法を受けるがん患者の学習課題—H.E.ペプローによる心的課題を視点とした事例分析—, *九州大学医学部保健学科紀要*, 1, 1-8.
- 大野和美(2000): 胃がん患者の術後回復期における食行動再構築の取組み—判断と自己決定の内容に焦点をあてて—, *日本赤十字看護大学紀要*, 14, 42-49.
- 尾崎新(2000): 「ゆらぐ」ことのできる力(1-30), 誠信書房, 東京
- 小澤勳(1997): 痴呆老人にみられるもの盗られ妄想について(2)妄想生成の力動と構造, *精神神経学雑誌*, 99(9), 651-687
- Richard S. Lazaus & Susan Folkman (1984) / 本明寛, 春木豊, 織田正美(2000): ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究, 実務教育出版, 東京
- 戈木クレイグヒル滋子, 寺澤捷子, 迫正廣(2004): 闘病という名の長距離走—病名告知を受けた小児がんの子どもへの闘病体験, *看護研究*, 69(267)-85(283)
- 千崎美登子(2001): 胃切除術を受ける胃がん患者の情緒状態と対処行動に関する研究, *北里看護学誌*, 4(1), 11-20.
- 鈴木真知子(1998): 不確かさの概念分析, *日本看護科学会誌*, 18(1), 40-47
- 谷口優子, 牧野耕次, 餅田敬司, 片岡三佳, 熊谷圭子, 瀧川薫(2003): 精神科看護学実習における学生が体験したゆらぎへのサポート, *日本看護研究学会雑誌*, 26(3), 214.
- 渡邊美智子, 松本彰子, 橋本数江, 岸本美子, 森木妙子(2007): 胃切除後患者を対象とした退院後の食事摂取に伴う症状への対処行動, *中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*, 3, 216-219.
- 山脇京子, 藤田倫子(2006): 胃がん手術体験者の職場復帰に伴うストレスとコーピング, *日本がん看護学会誌*, 20(1), 11-18.

資料1 ゆらぎ概念分析対象文献・書籍

属性、先行要件、帰結の記載のあった文献を○印で示す

No	著者(発行年):タイトル,掲載雑誌,巻(号)頁	取り扱っているテーマ	ゆらぎの使い方	属性	先行要件	帰結
1	日本総合研究所編(1998)/田坂広志:生命論パラダイムの時代(21-79),第三文明社,東京	イリヤ・プリゴジンの散逸拡散理論を生命論パラダイムへの転換	定義	○	○	○
2	尾崎新(2000):「ゆらぐ」ことのできる力(1-30),誠信書房,東京	社会福祉実践者のゆらぎをどう力にするか	定義	○		○
3	河野友信(1990):社会・医療のゆらぎの中での全人的医療 理想と現実、本音と建前の中で揺らいでいる実情,新医療,17(1),46-49	全人的医療を医療界や社会に定着させ、新しい医療の現実化	タイトル、全体	○		
4	藤田佐和(1996):がんを体験してる夫に付き添う妻が夫の病気の意味を見出していく過程に関する研究,高知女子大学紀要(自然科学編),44,91-107	夫のがん体験(病気)の出来事の意味を妻が見出すプロセス	結果(カテゴリー)、考察	○	○	
5	小澤勳(1997):痴呆老人にみられるもの盗られ妄想について(2)妄想生成の力動と構造,精神神経学雑誌,99(9),651-687	もの盗られ妄想の病態	定義、考察	○	○	○
6	小野智美、平林優子(1997):極低出生体重児を育てる母親への看護の役割—出産から児が1歳6ヶ月になるまでの母親の体験を通して—,聖路加看護学雑誌,1(1),52-56	極低出生体重児を持つ母親の体験とその意味	結果(カテゴリー)、考察	○	○	○
7	古賀有紀(1998):現代における入院患者の不安,神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録,23,80-85	内科病棟入院患者の不安	要旨	○		
8	柳原清子(1998):癌ターミナル期家族の認知の研究—家族のゆらぎ—,日本赤十字武蔵野短期大学紀要,11,72-81	癌ターミナル期を体験した家族のゆらぎ	サブタイトル、定義、キーワード、結果、全体	○	○	○
9	尾沼奈緒美、佐藤禮子、井上智子(1999):乳がん患者の自己概念の変化に即した看護援助,日本看護学会誌,19(2),59-67.	がん罹患で変化する自己概念	結果(カテゴリー)	○	○	○
10	関矢早苗(1999):HIV感染症を持つ日本人妊婦の母親になる過程の体験—ゆらぎの体験を中心に—,日本エイズ学会誌,4,275	HIV感染者の母親になる過程の体験	サブタイトル、結果	○		
11	阿部淳子(1999):【臨床の場で必要な精神看護】患者・家族ケアのポイント 緊急時のこころのケア—患者の「ゆらぎ」を支えるということ—,臨床看護,25(4),501-504	緊急時の患者のケア	サブタイトル、キーワード、全体	○	○	
12	柳原清子、黒川紀子(1999):教育レポート ホスピス実習—ゆらぎの体験を通して見出すケアの本質—,看護展望,24(4),497-501	ホスピス実習での学生の体験	サブタイトル、定義、全体	○	○	
13	渡辺裕子(2000):家族看護過程 家族という土壌を耕すケア理論と実際 援助方法 個々の家族成員に対する援助 情緒的サポート—家族成員が体験する心の揺らぎ,コミュニティケア,2(11),84-86	家族成員のゆらぎ	タイトル、全体	○	○	
14	安達祐子、谷岸悦子、金井悦子(2000):看護学生のスタディスキルの実態(その2)—3年間の変化—,日本赤十字武蔵野短期大学紀要,13,45-53	学生の学習習慣・学習態度の変化	結果	○		
15	中國久美子(2000):エクゼステンショナル・スーパービジョン看護におけるスーパービジョン その新たな可能性を探って第2回 ゆらぎながら臨床に立つ,ナースデータ,21(7),89-93	カウンセリング、援助者の根本的な困難やつまづき	サブタイトル、考察	○		
16	岡永真由美(2001):経産婦の生まない性に関する記述研究,聖路加看護学会誌,5(1),10-16.	最後の妊娠に対する意思決定	結果(カテゴリー)	○	○	○
17	日下和代、宮本真巳(2001):看護場面の再構築による臨床指導 学生のゆらぎをどう支えるか,精神科看護,28(8),66-71	臨床実習指導	タイトル、はじめに	○	○	○
18	小松浩子、野村美香、岡光京子、伊藤恵美子、鈴木久美、南川雅子(2001):老いと慢性病をもつことによる高齢者のセクシュアリティへの影響,聖路加看護学会誌,5(1),41-50	高齢者のセクシュアリティ	結果(カテゴリー)	○		
19	影山セツ子(2001):成人女性のアイデンティティ形成における結婚・家庭生活面での否定的要因—アイデンティティ達成度低位群4名の面接に焦点を当てて—,日本赤十字北海道看護大学紀要,1,45-53	女性のアイデンティティ形成の否定的要因	要旨、結果、考察	○		○
20	中國久美子(2000):エクゼステンショナル・スーパービジョン看護におけるスーパービジョン その新たな可能性を探って第10回「アセスメント」の発想を打ち壊す,ナースデータ,22(4),60-64	看護師のバーンアウトを成長の機会とする提案	考察	○		○

21	松永佳子(2002):断乳を受け入れるまでの母親のゆらぎ,日本助産学会誌,16(1),48-57	断乳時期の母親の思い	タイトル、キーワード、考察	○	○	○
22	谷津裕子(2002):熟練助産婦の「気づき」と「揺らぎ」看護のアートにおける「表現」に着目して,日本助産学会誌,15(3),148-149	助産師と妊産婦間の表現による特徴	タイトル、考察	○	○	
23	田畑邦治(2002):【がん告知のプロセスにかかわる患者理解とアプローチ】患者のための真実の倫理 告知をめぐる“ゆらぎ”が示すこと,ナーシング,22(3),44-48	がん告知をめぐる諸問題	サブタイトル、全体	○	○	○
24	濱町久美子(2002):産科診療所に勤務する助産師の分娩に関する判断のゆらぎ,日本看護科学学会学術集講演集,22,107	助産師の分娩に関する判断のゆらぎ	タイトル、分析視点、結果・考察		○	
25	谷口優子,牧野耕次,餅田敬司,片岡三佳,熊谷圭子,瀧川薫(2003):精神科看護学実習における学生が体験したゆらぎへのサポート,日本看護研究学会雑誌,26(3),214.	看護学生のゆらぎ体験へのサポートの効果	タイトル、目的、結果(カテゴリー)	○	○	○
26	旗持知恵子(2003):心筋梗塞を発生した成人病者の見通しの語りとその意味,聖路加看護学会誌,7(1),9-16	心筋梗塞患者の見通しの意味	結果(カテゴリー)	○	○	○
27	中村美鈴,鈴木英子,福山清蔵(2003):看護師の「ゆらぐ」場面とそのプロセスに関する研究,自治医科大学看護学部紀要,1,17-27	看護師の「ゆらぐ」場面とそのプロセス	タイトル、定義、目的	○		○
28	栗山洋子,森恵美(2003):助産師が自己価値のゆらぎから解放たれていく過程について,千葉看護学会誌,9(1),42-48	助産師の自己価値のゆらぎと回復過程	タイトル、定義、目的	○	○	○
29	牧野耕次,片岡三佳,熊谷圭子,谷口優子,餅田敬司,廿佐京子(2003):精神看護実習において看護学生が体験する「ゆらぎ」に関する実態調査,滋賀県立大学看護短期大学部学術雑誌,7,63-69	精神看護実習での学生のゆらぎ体験	タイトル、定義、目的	○		○
30	岡田由美子(2003):「揺らぎ」に付き添う人として,日本新生児学会雑誌,39(2),200	重症障害新生児の親に対する臨床心理士の役割	全体	○	○	
31	水谷みどり,山田由紀子,豊田郁子(2003):【発達障害がある児のケアとフォローアップ】事例にみる看護の実際 重症心身障害児施設における看護の事例 修学期における重症心身障害児と家族への支援,小児看護,26(12),1594-1600	重症心身障害児に対する親の受容	考察	○	○	○
32	中島登美子(2003):【デベロップメンタルケア】カンガルーケアの看護学的背景—早産の母親のゆらぎと癒し—,周産期医学,33(7),873-876	カンガルーケアの背景	タイトル、全体	○	○	○
33	森桂子,安田幸司,長野清美,島辺恵子(2003):透析導入期に解離性動脈瘤を併発した患者の不安緩和に向けて,透析ケア,9(2),183-188	不安緩和	考察	○	○	
34	廣川聖子,柴田真紀(2004):精神科看護師としての存在価値の揺らぎを体験した場面の分析,日本看護研究学会雑誌,27(3),126.	存在価値の揺らぎの体験	タイトル、定義、目的、分析視点	○	○	○
35	野村美香,藤田佳子,三井成子(2004):がん治療過程における家族集団のゆらぎに関する研究,死の臨床,27(1),69-75.	家族成員のゆらぎ	タイトル、定義、目的、結果	○	○	○
36	戈木クレイグヒル滋子,寺澤捷子,迫正廣(2004):闘病という名の長距離走—病名告知を受けた小児がんの子どもの闘病体験,看護研究,69(267)-85(283)	子どもの闘病体験によってもたらされる変化	考察	○	○	○
37	真柄希里穂(2004):ゆらぐことのできる力—構造分析—福祉実践者の場合,保健医療社会学論集,2(1),16-21	福祉実践者のゆらぐことのできる力の構造分析	タイトル、目的	○	○	○
38	岡田由美子(2003):重症障害新生児医療のガイドラインを巡って「揺らぎ」に付き添う人として—臨床心理士の立場から—,日本新生児学会雑誌,39(4),778-780	重症障害新生児の親に対する臨床心理士の役割	全体	○	○	
39	吉野智恵,菅沢由美子,宮原枝里,田島尋美(2005):在宅ターミナルケアを支える力—家族のゆらぎを「みまもる」こと—,日本看護学論文集:成人看護II,36,15-17.	在宅ターミナルケア	タイトル		○	
40	熊谷圭子,谷口優子,西川恵子,片岡三佳,牧野耕次(2005):精神看護学実習における看護学生の“ゆらぎ”体験への影響因子,日本看護学論文集:看護教育,36,122-124.	実習での学生のゆらぎへの影響因子	タイトル、定義、分析視点	○		○
41	赤石三佐代,石田順子,石田和子,植原早苗,神田清子(2005):放射線治療経過に伴う乳がん患者の気持ちの変化, The Kitakanto Medical Journal, 55(2),105-113.	放射線療法中の乳がん患者の気持ち	結果(カテゴリー)	○	○	

42	林田裕美, 岡光京子, 三牧好子(2005): 外来で化学療法を受けながら生活するがん患者の困難と対処, 広島県立保健福祉大学誌: 人間と科学, 5(1), 67-76.	外来化学療法がん患者の困難と対処	結果(カテゴリー)	○		○
43	真柄希里穂(2004): ゆらぐことのできる力 構造分析-福祉実践者の場合-, 臨床福祉ジャーナル, 15巻特別, 76	福祉実践者のゆらぐことのできる力の構造分析	タイトル, 目的	○		
44	仲沢富枝(2005): 内シャント造設患者の心理状態への援助-口イ看護論の自己概念適応様式を活用した説明モデルの分析から-, 日本腎不全看護学会誌, 7(2), 66-71	透析シャント造設患者の心理	結果(カテゴリー)	○	○	
45	台利夫(2005): 子どもの遊びに見る気まぐれと自発性, 教育と医学, 53(2), 156-164	子どもの遊びの気まぐれ	定義(ゆらぎの仮説)	○	○	○
46	岡戸有子, 小川一枝, 川崎芳子, 白木富幸, 小倉朗子(2005): ALS 療養者における在宅療養継続の困難要因に関する検討-介護体験者へのインタビューをとおして-, 日本難病看護学会誌, 9(3), 200-204	在宅療養継続の困難要因	結果	○		○
47	西野敏夫(2005): 専門家としての揺らぎと回復, アディクションと家族, 21(4), 414	専門家(臨床心理士)としての揺らぎ	タイトル, 序章	○	○	
48	佐々木亜紗美, 内藤三恵子(2006): ゆらぎを示す終末期患者家族の事例を基に看護師の反応を考察する, 日本がん看護学会誌, 20(suppl), 278.	ゆらぎを示す家族に対する看護師の反応	タイトル, 考察	○	○	○
49	青木実枝, 佐藤幸子, 遠藤芳子, 遠藤恵子, 後藤順子(2006): 基礎看護学実習におけるインシデントレポートからみる学生の思考プロセスと教育上の課題, 日本看護学会誌, 16(1), 231-237.	学生のインシデント時の思考と対処方法	定義, 考察	○	○	○
50	坊垣友美(2006): 手術期看護実習が学生にとって「大変」な意味の構造, 日本看護学会論文集: 看護教育, 37, 446-448.	学生の「大変」の意味	分析視点, 結果(カテゴリー)	○	○	○
51	浜川敏彦, 長濱時子, 幸地睦子, 奥濱杖子(2006): グループホームへの入居過程でみせた「ゆらぎ」-事例を通して支援のあり方を考える-, 日本精神科看護学会誌, 49(1), 72-73	環境変化(施設→地域)による患者の心理変化への支援方法の検討	タイトル, 目的	○	○	○
52	白木智子(2006): ラベルワーク技法を用いた老年看護学実習における看護学生の学びの質的研究, 広島国際大学看護学ジャーナル, 4, 1-14	老年看護学実習での学び	考察, アブスト	○	○	○
53	都丸直美(2006): 在宅での看取りを選択した家族の心の揺らぎに対応した看護支援のあり方-ターミナル期にある患児の訪問看護の振り返りを通して-, 日本看護学会論文集: 地域看護, 36, 58-60	事例: ターミナル期の患児家族の在宅看護支援	タイトル, 目的, 分析視点, 考察	○		
54	坊垣友美, 杉山朋春(2006): 学習意欲を引き出す授業研究「死の模擬体験」の授業効果-死のイメージ形成と完成のゆらぎの観点から-, 看護教員と実習指導者, 2(5), 71-79	模擬体験授業の効果	タイトル, はじめに	○	○	○
55	宮上多加子(2007): 家族介護者の認知症介護に関する認識の変容プロセス, 高知女子大学紀要(社会福祉学部編), 56, 1-11.	家族介護者の認識の変容プロセス	結果(カテゴリー)	○	○	○
56	岸田恵子(2007): 前向きに生きているパーキンソン病患者の「病い」の体験に関する研究, 日本難病看護学会誌, 12(2), 125-135	在宅パーキンソン患者の病いの体験	結果(カテゴリー)	○	○	○
57	岡京子(2007): 介護現場実習学生における「自己の揺らぎ」体験-利用者と関係形成不全場面の記述から-, 保健医療社会学会論集, 18(特別)	介護福祉学生の自己の揺らぎ	タイトル, 目的	○	○	○
58	塚野未来, 金井千春, 下田リサ, 松村架奈子(2007): 脳血管障害を抱えた患者・家族に対する退院に向けてのアプローチ, 磐田市立総合病院誌, 8(1), 14-19	在宅介護への意思決定	まとめ	○		
59	習田明裕, 志田岐康子, 添田英津子, 田邊稔, 野末聖香(2008): 生体肝移植を受けたレシピエントの苦悩・葛藤に関する研究, 日本保健科学学会誌, 10(4), 241-248	生体肝移植を受けたレシピエントの苦悩・葛藤	結果(カテゴリー)	○	○	
60	小山裕子, 森本悦子, 福井里美(2008): がん患者と接する看護師の「ゆらぎ」とその対処, 日本がん看護学会誌, 22(suppl), 102.	ゆらぎの捉え方と対処	タイトル, 目的	○		○
61	片山美子, 小笠原昭彦(2008): がん患者の入院治療経験によるこころの苦痛と看護介入に関する仮説, 日本看護科学学会誌, 28(3), 52-58.	肺がんサバイバーの心の苦痛	結果(カテゴリー)	○	○	○
62	牧野耕次, 比嘉勇人, 甘佐京子, 松本行弘(2008): 精神看護学実習において看護学生が体験したゆらぎのレベルとその評定基準, 人間看護学研究, 6, 27-37	看護学生のゆらぎのレベルの分類	タイトル, 定義, 目的	○		○

63	岩崎和代 (2008) : 女性透析患者の妊娠・出産経験の意味づけ、日本母子看護学会誌, 2(1), 5-15	透析患者の妊娠・出産経験の意味	結果(カテゴリー)	○	○	
64	中村博文、渡辺尚子(2008), 精神科病院見学実習における不安測定尺度の検討, 北日本看護学会誌, 10(2), 53-58	精神科看護実習に対する不安尺度作成	考察		○	
65	小元まさ子、工藤綾子、服部恵子、永野光子、藤尾麻衣子(2008) : 看護師の離職を招いた要因—看護基礎教育課程修了後6年未満の看護師に焦点をあてて—, 医療看護研究, 4(1), 72-78	看護師の離職理由	結果(カテゴリー)	○		
66	加藤咲都美、密野祥子(2008) : 【家族のつながりを支える—家族形成期に焦点をあてて】当事者から 家族の揺らぎと絆「流産・死産経験者で作るボコズママの会」の調査から, 家族看護, 6(1), 100-104	流産・死産後の家族関係	タイトル	○	○	
67	濱田穂(2008) : 【当事者の活動に専門職はどうかかわるか】薬物依存をもつ当事者の活動と看護—価値観の揺らぎを通して見えてくる患者—看護師関係とは—, 精神科看護, 35(9), 12-17	薬物依存症の回復支援団体での看護活動	サブタイトル、考察	○		○
68	青木早苗、尾原喜美子(2008) : 実習指導者の「ゆらぎ」に関する研究—ターミナル期のがん患者を受け持つ学生の指導を通して—, 日本看護学教育学会誌, 18, 30	実習指導者のゆらぎの要因	タイトル		○	
69	青木早苗、尾原喜美子(2008) : ターミナル期のがん患者を受け持つ看護学生を指導する実習指導者のゆらぎ, 高知大学看護学会誌, 2(1), 3-13	実習指導者のゆらぎの要因	タイトル、目的、定義、分析視点、結果、考察、要旨、キーワード	○	○	○